

# 腕のいい鉄工所の イメージから、 精密さを謳<sup>うた</sup>った社名に



## 国体ボウラー

183センチの長身から繰り出されたボールがレーン上で鋭くフックし、美しい正三角形を描いたピンの列をことごとく打ち砕いた。株式会社ヒューテック代表取締役・藤原多喜夫は、ボールを投げた右腕をそのままからだのまゝで左腕と交差させ、ガッツポーズをキメる。そして、その派手なパフォーマンスとは裏腹に、「まだ、投げられるもんやな」と、'99年の国体選手は自嘲気味にぼつりつぶやいた。

ボールをグリップするための3つのホールは、自らがフライス盤で穿<sup>うが</sup>ったもの。右手首を手<sup>お</sup>甲のように覆ったリストタイ(ボールを

持つ手を固定する器具)も自作。

ボウリングを本格的にはじめたのは20歳だった。近所のボウリング場主催のコンペに、賞品の29インチテレビが目当てで出場した。結果は惨敗。けれど、出場していたベテランのアマチュアボウラーにフォームをほめられた。「素質がある。つづけたほうがいい」少しばかりその気になって、ボウリング場通いをしているうちに、藤原の言うところの「ヘンなスイッチが入った」。どンドン面白くなって、のめり込んでしまった。間もなく、そのボウリング場に君臨するトップボウラーに引き合わされ、師事することに。彼こそが、藤原の人生に影響を与えるふたりめの人物となった。歯科医である師匠のボウリング理論

に、技術に、魅了された。だが、なにより強く惹きつけられたのは、その孤高さだった。自分が自分であることを強く持つ師匠は、他のボウラーらとけっして馴れ合わず、時に喧嘩になるような意見も平気で言い放った。

藤原は、常にひとりで立っている師匠に憧れた。それは、あの頃の自分になにより欠けていたものだったから。

## 逆上がり

藤原少年にとって、「ドンズ」は呼ばれたいないあだ名だった。ドンズのドンは、ドンくさいのドン。そう、たしかに子ども時代の彼はすべてにおいて冴えなかった。喧嘩も弱い。勉

株式会社ヒューテック / 代表取締役

# 藤原 多喜夫

ふじわら たきお



## 教えるということは、いかにコツを体感させるかなんですよ

強もできない。運動も苦手。身長は高かったが、肥<sup>と</sup>っていてスローモーター。

そんな彼の人生に影響を与える最初の人物が現れる。5年生の時だ。体育の時間に鉄棒の逆上がりをするようになった。当然ながら、藤原にうまくできるはずもなかった。

ところが、熱血漢の担任教師はあきらめない。できるまで、付きっきりで教えてくれた。授業中、クラスのみなが注視するなかでつづけなければならないのは藤原にとってひどく辛いことだった。恥ずかしさ、悔しさが涙が出そうになった。ドンズな自分がこの時ほど恨めしかったことはない。

しかし、先生の教えに従って繰り返すうち、重いからだか鉄棒上に引きあがり、藤原の頭の下でぐるりと地球が1回転した。「できた！」教え方がうまいとこんなふうによくいくのか——藤原は驚きとともにそれを受け入れた。人生のターニングポイントとなる、ちいさいが大きな出来事だった。「教えるということは、いかにコツを体感させるか、なんですよ」と藤原は言う。いまでも、彼の現場教育の指針になっている。

### 削り

熱血教師による逆上がりの一件は、あきらめずにつづけることの大切さも藤原に教えてくれた。いちどはじめてら、絶対にあきらめてはいけない。それが自分ができるたったひとつのことだから。

「これやってみろ」ある日、父の薫さんにフライス盤の鋳物のハンドルカバーにドリルで穴をあける仕事を命じられた。家業の手伝いである。父は自宅で藤原鉄工所を営んでいた。

削りの仕事は面白かった。藤原は夢中で100枚、200枚と削った。へんなスイッチが入ったのである。

作業過程で、ドリルをグラインダーで研ぎ下ろす必要が出てくる。これは工夫がいった。研ぎすぎればドリルの太さが変わり、穴の大きさもちがってしまう。研ぎがうまくいくまでに2か月を要した。

仕事を認められればうれしかった。やがて、藤原は旋盤を扱うようになっていた。

「これに関してだけは負けたくないんです。なにかを跳ね返せない自分が、できる自分になれる。すぐれたところがなにとつない自分が、継続すればできるようになるんだ——その一心でしたね」

もうひとつ、からだの大きな自分の指先が、精緻で美しいものを生み出すという、その妙に興を覚えてもいた。

中学に入るとバスケットボール部に入った。基礎練習がきつくて、1年生のうちに大半の部員が辞めてしまった。耐えてつづける道を選んだ藤原は、その長身を生かしたプレーでついに2年生でレギュラーの座をつかんだ。

一方、削りの道にも動<sup>いそ</sup>んでいた。グラインダーでつづきりの刃<sup>いそ</sup>が研げること、ネジの

切り上げができることは、当時、削り職人として上級者の目安である。中学生の藤原は、この技術をすでに自分のものにしていった。

工業高校に進んでからもバスケットボールはつづけレギュラーになった。ひとまずへんなスイッチが入ってしまったら、それをひたすら継続するのが藤原である。だからバスケットは社会人になってからもクラブチームに入つてつづけた。後に出会ったボウリングは、国民体育会に選出されるまでになっている。

そんな彼があきらめてしまったことがある。

### 再生

モノづくりの道で食っていくことはきめていた。それも最終的には家業を継ぐことになるだろう。そのまゝに、自分の腕前がどこまで通用するのか——高校卒業後、藤原は金型工場に就職した。子どものころからの下地があるから、すぐに現場仕事に馴染んだ。技術には自信があった。ちょっとまゝまで高校生だった藤原に負け、己を恥じて辞めていく従業員もいた。

得意だった。けれど、所詮は小手先なのである。図面を見て、数値は理解できても、自分がつくろうとしている製品を、その用途から真に理解できていなかった。数字の上で正確であろうとするばかりの集中力はそう持続できない。経験あるプロになら自分の仕事にメリハリをつける技があった。

経験不足からの停滞感を持った時、藤原は、「NC機械を触らせてもらえないから」という理由を自分に与え、1年半で職場を去る。

その後、すぐに十二指腸潰瘍を患って入院。挫折感がからだに精神にのしかかっていた。肥<sup>と</sup>っていたからだは痩せさらばえた。ディスコの隅の席でやけ酒をあおるサングラスにジャンパー姿の藤原の姿があった。

荒れる息子に、家業に就くよう諭したのは母、利江さんだった。

藤原鉄工所に入社してからも、ベテラン職人に反発、教えとは真逆の方法で仕事をして見せた。自信だけは相変わらずあった。「いちど不況を乗り越えなければ真の経営者にはなれない」オイルショック経験者である薫さんの口癖には、「よーし、きてみるよ」と思っていた。

すると、間もなくほんとうにきた。バブル崩壊である。

いざきてみると、「ダメやろ、これは……と」思いましたね(笑)」

仕事の注文はみるみるうちになくなった。父は、いい意味でも悪い意味でも、「町工場のオッチャン」であった。「豪放磊落<sup>ごうほうらいらく</sup>で、ええかげんで……それでも、まわりのみんなも親父のファンやったし、おれもそやった」

自分がやるしかない。藤原は製品見本を持ち、あちこち営業して歩いた。

いよいよ倒産目前というところまで追い込まれてしまった。1,700円の注文がたった1個しかないという日には泣けてきた。せつかく

出てきているみんなに仕事をさせてやれないことに涙が出たのだ。汎用機でマシニング以上の加工をする腕利きの職人らが仕事をできずにいる。それが悔しくてならなかった。

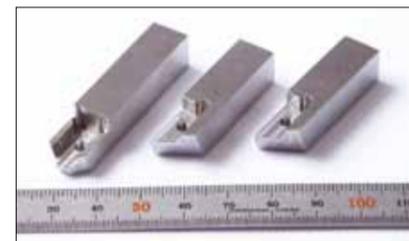
我慢の年月はつづいた。暖かな陽のさす時もあった。そんな日々のなか、藤原は友人の紹介で知り合った恭子さんと結婚。彼女も会社の経理を見てくれた。藤原はつづける。やめずにつづける。それしかないではないか。そして、こんどのアメリカ発の病にも、「きっちり流行に乗ってますわ」と笑う。

昨年7月に代表取締役役に就任。生粋の削り職人だった藤原にとって現場への未練はある。「かつて現場を離れたのは、生き残るためでした。これからはみなで利益を得るためにそうするんです」

藤原は社名を改めることにした。かつて、大きなからだの自分がちいさく精密なものを生み出すところに興を覚えた。鉄工所という無骨な場所が精緻で美しいものを生み出す——「けれど、それではぬるいんです」

ヒューテックは、人間の手の温もり(ヒューマン)とテクノロジーの融合だ。「これまで、腕のいい鉄工所というイメージやったと思います。精密さを謳<sup>うた</sup>ったからには、持てる技術を大いに見ていただきます」藤原のスイッチはとっくに入っている。

(取材・文=上野 歩)



切削用ホルダー・治具



高精度フランジ・ボディ・台金

### Company Profile

エミダス登録番号：81278

- ◆会社名 株式会社ヒューテック
- ◆所在地 大阪府大阪市鶴見区今津南 2-7-13
- ◆TEL/FAX TEL：06-6961-9252 FAX：06-6968-7255
- ◆設立 1966年
- ◆資本金 500万円
- ◆従業員数 8人
- ◆事業内容 単品・小ロットの小〜中型の各種精密金属加工

- ◆得意&特異技術 NC旋盤・NCフライス・MC加工の3DCAD/CAMプログラム加工に加え、熟練工の汎用加工・ワイヤーカット・内面・円筒・平行研磨加工等を駆使して各種精密治具を単品・単納期対応。高精度のフランジ・ゲージ・アーバー・スピンドル・治具・超音波測定器の試験片や装置なども1品から対応。
- ◆注文・製品に関するお問合せ 担当：代表取締役 藤原多喜夫 TEL：06-6961-9252